

偽年號考

和装本

リ 4
4708



偽年號考

14
9708



4-29
18
1896

リ
4708
5

關東偽年考

關東偽年考

五
五
五



關東公事考



偽年辨考

常陸誌料之内

中山信名平四著



應永中上杉禪秀ノ亂アリテヨリ關東穩ナラス既ニシ
 テ京鎌倉ノ二將相合ハサルニ及テ幕府ノ令スル所鎌
 倉コレヲ奉セス年号ハ天下ノ大儀ナリ然レモ或ハコ
 レヲ拒テ用ユルコトナキニ至ル凡年号ハ朝廷ノ命ノ
 預ル処ニテ武家ニ議シテ當時國柄武家ニアルヲ以テ朝
 廷コレヲ所トイハレ天下ニ行フモノハ武家ノ令ニ正
 出ルヲ以テ鎌倉コレヲ奉セサルニ至ル武家ノ令ニ正
 長二年改メテ永享トス鎌倉コレヲ用ヒス正長ノ号ヲ
 行ノコト三年ニシテ後ニ永享ニ從フ神明鏡ニ幾クモ
 ナクシテ永享亂アリ持氏害ニ逢フ鎌倉主ナシ寶徳中
 成氏位ニ復ストイハレ上杉憲忠ヲ誅シテヨリ又京師

妙泉福德三十二年四月四日妙正福徳四正月六日
五年以後ノ号ヲ行ハケタルモノ見エナリ
年庚戌ニ始マリ明應ニ癸丑ニ止マリシト見エタリ
永正中ニ彌勒ノ号アリ凡テ二年ヲ經夕リ常陸國六段
寺惠範トカ題セル心願文ノ末ニ彌勒二年於野不勤院玉幡藏
之供養ト云レリ願文等ヲ載リ願文同正申三月六日調文アリ
其年八月正サテ永正ノ何年ニテ始メテ一ノ日ト考ル本
四年八月正サテ永正ノ何年ニテ始メテ一ノ日ト考ル本
土寺過去帳ニ日富弥勒元丙寅十一年十一月十一日トアリ
丁卯ハ永正三年也号ナラハ是年始メテ一ノ日ト考ル本
丁卯ハ永正三年也号ナラハ是年始メテ一ノ日ト考ル本
月ト作ルモ自相齟齬ト見エテハ春弥勒元丁卯トアリ
家ニハ弥勒ノ号ナラハ是年始メテ一ノ日ト考ル本
歲ト云ハルコトナラハ是年始メテ一ノ日ト考ル本
ケレバ其義ハ同シカト音同シハ陰陽者流ノ説ニ出タル
一會津新宮大勸進僧淨尊證一神器頭代左兵衛少尉藤

原知盛小守宮預リ所代右大勸進僧淨尊横三郎壬生卯二
月二十日宮預リ所代右大勸進僧淨尊横三郎壬生卯二
未會津新宮正中弥勒元卯二月廿二日トアリ
四年ノ号ヲ用ヒシモト見ユレト見ユレト見ユレト見ユレト
命禄ノ号アリ凡テ三年ヲ經夕リ天氏所藏ノ年頭書ニ
庚子命禄元年ニ始メテ壬寅命禄ノ天氏所藏ノ年頭書ニ
年トシハ天文九年ニ始メテ壬寅命禄ノ天氏所藏ノ年頭書ニ
上寺過去帳ニ妙了命禄ニ正月廿一日トアリ本以上ノ
三弭皆關東俗間ノ用ヒシ所ニテモト佛家ヨリ出タリ
故ニ其号多クハ佛寺ノ記録器財ニ存セリ鹿島ノ神号
ア以テ社僧多クハコノ神宮中古ヨリ兩部トテ神宮
寺以下ノ社僧多クハコノ神宮中古ヨリ兩部トテ神宮
七ノモトニハ藏セシモト見エタリ多ク東國ノ事實ヲ
載クモ他家ノ前ニ引證スル蓋當時兵革相ツギ蒼生安住
スルコト能ハス爰ヲ以テ歲運ヲ變セシカ爲ニ僧家假

ニ福徳弥勒命祿等ノ号ヲ設ケシヲ頑民年号ノ重事ナ
ルヲ知ラサル故ニ猥ニ流傳セシモノナリ武家ノ記録
ニ是号ヲ用ヒシコトナキハ士大夫以上ニ及バザリシ
コト亦以テ見ルバシ是号互相以東ニ限ルコノ故ニ今
ニ至テコレヲ關東ノ偽年号ト稱スト云

皇朝ノ古專西土ノ典章制度ニ遵ハセ御世ノ名ニモヤ
カテ年号ヲ用ヒ玉ヒシヨリ以來國史日次ニ必コレヲ
記スナリ史ヲ按スルニ孝徳天皇ノ朝ニ大化白雉ア
リ天武天皇ノ朝ニ朱鳥アリソノ後文武天皇ノ朝ニ大
宝ノ号アリシヨリ今ニ絶ユルヲナシ然ルニ文武天皇
ヨリ上レル御世々々ノ年号ノ史ニ載セサルモノヲ藤
原貞幹ノハヤク總ニ集メテ逸年表ト云フ書ヲ著シテ
其傳ハノ異同アルヲ記シ近クハ關東ノ民間ニノミ用
ユル年号ヲ中山信名ノ偽年号考ニ詳ニ辨セラレタリ
コレヲノ異年号ヲ知ルモ亦史學ノ一端ナリカツテ異
年号ニ聊イフハキコトアリ先ツ孝靈天皇ノ列滴ヨリ

附言

皇朝ノ古專西土ノ典章制度ニ遵ハセ御世ノ名ニモヤ
カテ年号ヲ用ヒ玉ヒシヨリ以來國史日次ニ必コレヲ
記スナリ史ヲ按スルニ孝徳天皇ノ朝ニ大化白雉ア
リ天武天皇ノ朝ニ朱鳥アリソノ後文武天皇ノ朝ニ大
宝ノ号アリシヨリ今ニ絶ユルヲナシ然ルニ文武天皇
ヨリ上レル御世々々ノ年号ノ史ニ載セサルモノヲ藤
原貞幹ノハヤク總ニ集メテ逸年表ト云フ書ヲ著シテ
其傳ハノ異同アルヲ記シ近クハ關東ノ民間ニノミ用
ユル年号ヲ中山信名ノ偽年号考ニ詳ニ辨セラレタリ
コレヲノ異年号ヲ知ルモ亦史學ノ一端ナリカツテ異
年号ニ聊イフハキコトアリ先ツ孝靈天皇ノ列滴ヨリ

以後大宝己前ノ年号トイフモノ、恐ラクハミナ朝家ニ
テ定メ玉ヒシ所ニハアラス、己ニ逸号年表ニ引証スル
モノ國史ヲ除ク外、マサシク當時ノモノトテハ、南都
薬師寺ノ東塔擦銘、法隆寺釈迦仏後背銘、那須國造碑ノ
三、道後湯碑ハ、風土記ノ文ニ据ルトイハ、亦証トスル
ニ足レリ、ソノ中擦銘ニハ年号ヲ記サス國造碑ノ朱鳥
ヲ辨論ナキニアラス、サラハ法興ノミコソアレ、餘ハミ
ナ後世ノ縁起野史ノ追記ニ出タリ、異邦ノ書ニハ、舊唐
書ニ白雉アリ、西蕃ノ傳ハナレハ、聊年代ノ違ヒハアル
ハシ、海東諸國記ハ、年代記ナトノ傳ヘテ受テ記シタル
マテ也、按スルニ、法興モ元年号ニハアラス、法王帝説云、
釈曰、法興元世一年、此能不知也、但案帝紀云、少治田天皇



之世、東宮厩戸豊聰耳命、大臣宗我馬子宿禰、共平章而建
立三宝、始興大寺、故曰法興元世、此即銘云、法興元世一年
也、後見人若可疑、年号此不然也、然則言一年字、其意難見、
然所見者、聖王母穴、太部王薨逝、辛巳年者、即少治田天皇
御世、故即指其事故、云一年、其无異趣ト見エタリ、ソノ時
ニ當リテ、仏法興隆ヲヨロコバセ玉ヒテ、稱ニシテ、年
号ナラヌト著明シ、カレハ後世ノ弥勒福德ノ偽号ノ如
キモ、其年ノ凶ヲ改メイハ、シトテ、ソノワサナレハ、何レ
モカリソメニ稱スルモノニシテ、古今異ナリトイハ、氏、
其趣ハ其夕相似タリ、ソノ余ノ古代ノ佚号ハ、イカナル
嗚呼ノ者カ作り出ケル、ソノ詳ナルヨシハ、考フハ、カ
ストイハ、氏、オモフニ決シテ朝家ヨリ行ハレシ所ニハ

聖徳六年 己
東山ノ同朋友阿弥
ガ君基観ニアリ遠
年号表ニ古本水鏡
テ載ルハ舒明元元引
テ年ナリ六年甲午
ナレハアハズ

アラテ、私ニ作りマウケタルモノトゾ思ハル、藤原貞
幹ノ續日本紀ノ詔ニ、白鳳以來朱雀以前年代玄遠尋問
難明トアル文ニ据リテ、史ニ載セサルモノナキハアラ
ストイハト、正シキ佚号トシモ思フハカラス、サレト異
聞ヲ弘ムル一助ナキハアラス、猶二書ノ遺漏ヲ左ニ
記ス、

經明

尾張國風土記云、中島郡、中島郷、活目入彦五十狹茅天
皇、即位十年辛丑、倭姫命、奉天照大神、遷幸于美濃國伊
久良河宮、積四年奉齋、經明四年之年、遷此郷、号中島ト
アリ、コノ文ニ据リテ推ス、片ハ、垂仁天皇ノ四年ニ當
レリ、太神中島郷ニ遷幸ノ事、史ニ見エス、且ツ風土記

殘篇ハ疑ハキト多シ

端正

安藝國、伊都岐島神社縁起文ニ、端正五年癸未トアリ、
逸号年表ニ、源平盛衰記ヲ引テ、端正五年ハ、推古天皇
元年癸丑トス、コノ縁起ニ癸未トアルニヨレハ、推古
天皇三十一年ニ當レリ、記ミテ参考ニ備フ

證明

近江國、甲賀郡、油火明神社記文ニ、證明四年トアリ、然
レハ支干ヲ係テ記サレハ、今考ルニ由ナシ、

泰平

百練抄云、承安二年閏十二月ノ條ニ、近日諸國稱有改
元之由、公家被誡仰、其号泰平紫スルニ、此時ハ改元ノ

紀州名所圖會伊都郡
川北の條地蔵寺古
き石燈籠の柱あり大
道元年七月吉日、大
才傳へて云、大道は
同と同昔此石弘法大
師歸朝の時建つる所
のこゝを引て同とく
元弘の物とす、これハ
北越南紀同年号とし
あり奇といふよしと

大道

議ノミ、アリテ、ソノ事公ケナラスシテヤミケルニヤ、
高倉宮實ハ、越後ニ落玉ノヨシ、御墓モ今猶ホ彼ノ
地ニ存セリト、高倉宮御墓考トイフ書ニ見エタリ、ソ
ノ書中ニ云、蒲原郡佐取村ノ吏某カ先祖、石井彦七ト
云モノニ、カノ高倉宮ノ裔吉次ト云フ者、村境ノ別ヲ
定メシ片ニ、ツカハシタルトイフ古文書ノ奥ニ、大道
二年八月二日源吉次トアリテ、草名ヲスエタリ、支千
ナケレハイツトモ定メ難ケレ、紙質字体ヲ見ルニ
元弘建武ノ頃ノモノトイハリ、
永福
或ル人ノ大和ニテ得タリシ、古寫經零本ノ跋文ニ論

第一卷同學抄破戒、俱生、分利、永福丁七月三日於法隆
寺東院花園院書寫之トアリ、コノ經跋ヲ見タリシ人
ノ南北朝ノ頃ノモノト思ハルトイフニヨレバ、丁酉
ハ延文二年ニ當レリ、

天靖

上島下島家系譜ニ、天靖元年トアリ、特世ニヨルニ後
南朝ノ年号ニテ、北朝嘉吉三年癸亥ニ當レリ、南方紀
傳櫻雲記ニヨルニ、文安元年甲子ナルハシ、前年ニ兵
起リタルハ、不意ニ出ツルハ、年号ノ沙汰ニテハ及
サルハシ、二書トモニ文安元年新皇ト稱シ奉リ、再興
ノヲ顯然タルバ、改元モアリシナルハシト、異年号考
ニ見エタリ

寶壽

天明二年壬寅三月十一日信濃國佐久郡上畑村ニテ
土中ヨリ掘出ス所ノ鍍金六角宝塔銘云奉納大乘妙
典六十六部雲州之住侶周慶宝壽二年今月今日トア
リ右宝塔ヲ掘出タル日天文二十年ノ銘アル經筒ヲ
モ掘出タリト云ハリ按スルニ明珍家譜ニ寶壽二年
甲午正月明珍信家トアルニ据ル片ハ天文三年甲午
天ニ當レリ經筒ノ天文廿年トアルニテモ天文ナルハ
キヲ論ナシ同書ニ見エタリ

天保十年己亥孟夏之日
山崎美成識



